

伊佐爾波ゆ神社『まある』

～石段が織りなす多世代コミュニティ～

松山市には数多くの神社仏閣が存在する。パワースポットとして有名な伊佐爾波神社のほかに「お結び玉祈願」が人気の円満寺、四国八十八箇所霊場の第51番札所で、ミシュランガイドで1つ星に選定された石手寺、松山城のふもとに位置している東雲神社などさまざまな。しかし、近年定住者の減少や信仰宗教の多様化によって神社仏閣が減少傾向にある。

また、観光地にキャパシティ以上の旅行者が押し寄せることによって、混雑や騒音、マナー違反などの問題が地域住民の生活や自然環境に悪影響を与えるオーバーツーリズムが今問題となっている。そんな人口減少と観光公害を解決するため地域の寄り添いの場となり、人と人、建物と人、地域と建物が繋がる交流施設『まある』を提案する。

本計画は伊佐爾波神社の石段に合わせて設計を行った。敷地に高低差があることにより、アクセスのしにくさや、無駄な空間が発生しやすいなど課題がある一方で、空間に様々な可能性がひろがる。建物は傾斜地にできることで、地形や風の流れが生まれ、その環境が変わってくる。そして、空間内部での垂直方向の「しつらえ」が大きく変化し、建物から見えるまちなみや空と大地の姿が大きく変わってくる。この『まある』は観光客と住民、子どもからお年寄りまで、様々な人が訪れて楽しめる場所である。多世代の人たちが集まり、一緒に時間を過ごすことによって新しいコミュニティが生まれ、観光客も観光地本来の姿を楽しむことができ、そこに暮らす人々も自分たちの地域や文化を壊すことなくこの松山が…そして愛媛がもっと住んでいて良かったと実感できる あたたかさ溢れた魅力ある場所になってくれることを願う。



図書館「こもれび」

この図書館は社社の雰囲気と調和させるため木造とした。CLTを構造躯体として建物を支えと共に、断熱性や遮音性、遮炎性、遮熱性などの複合的な効果が期待される。伊佐爾波の石段と共に建物も上がっていき、平面的なつながりと立体的なつながりそのどちらともが新しいコミュニティ空間を作り出す。

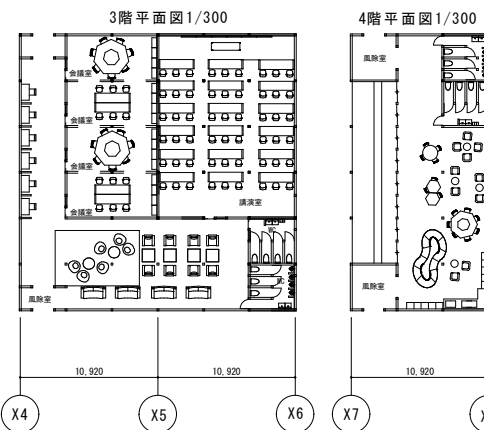
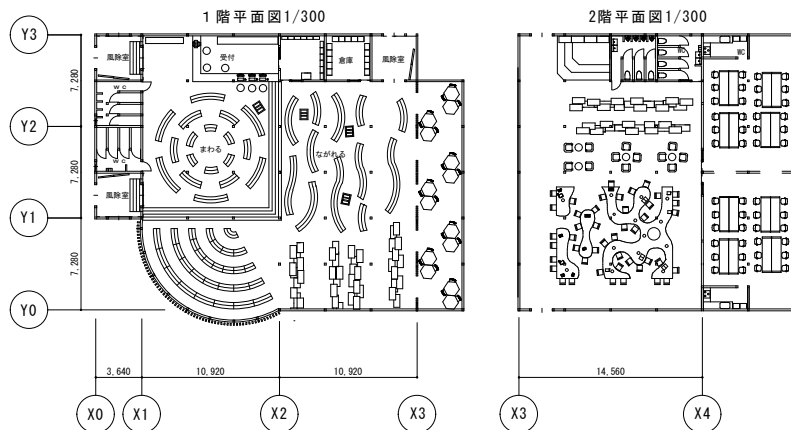


図書館へ行くことの意味を捉え直す

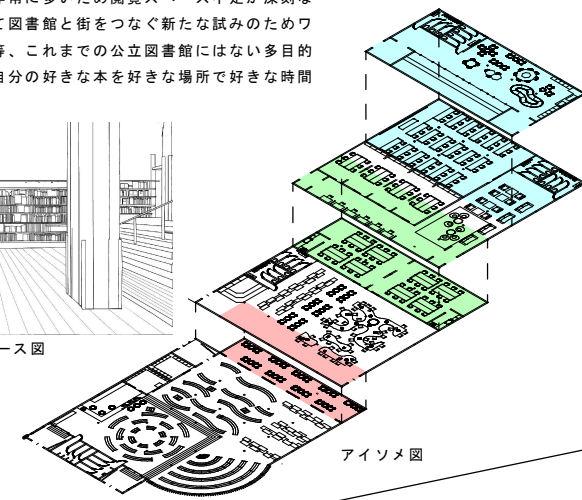
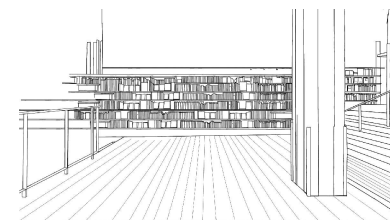
インターネットにより素早く情報に到達できるようになった。つまり知りたいことはインターネット上で調べることができる。しかし知りたい情報がわからない人が出かけて行って、情報に触れるリアルな空間「図書館」を求めるのではないかと考えた。

偶然の出会いを生み出す本棚

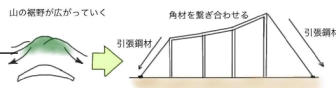
書籍にICチップを付け、それぞれどの本棚でも貸し出しができ、どの本棚に返してもよいというシステムを取り入れた。本が流動的に移動し、並ぶ本はいつも変化していく。自分で情報を探し取捨選択する能力が備わる。



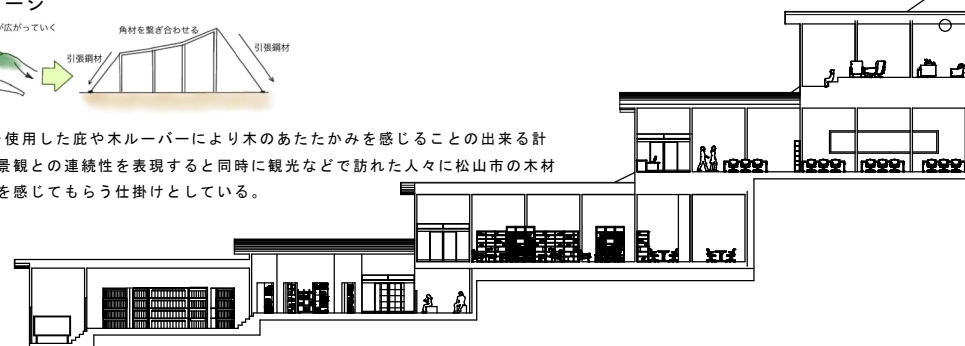
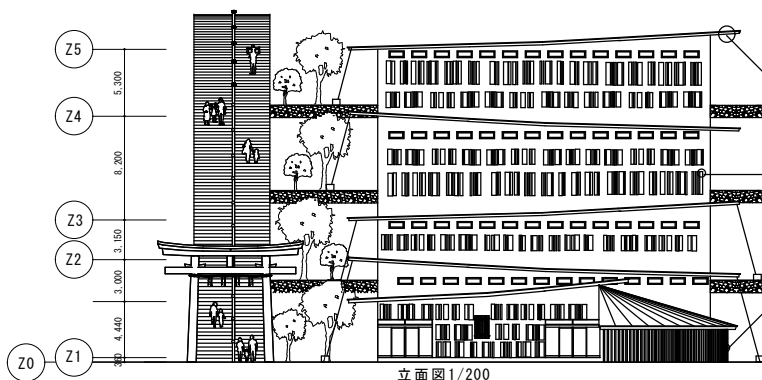
図書館では、利用者が非常に多いため閲覧スペース不足が深刻な問題となっている。加えて図書館と街をつなぐ新たな試みのためワークショップやイベント等、これまでの公立図書館にはない多目的なスペースも計画した。自分の好きな本を好きな場所で好きな時間読むことができる。



屋根のイメージ



外観は、CLTを使用した底や木ルーバーにより木のあたたかみを感じることの出来る計画とし、周囲の景観との連続性を表現すると同時に観光などで訪れた人々に松山市の木材活用の取り組みを感じてもらおう仕掛けとしている。



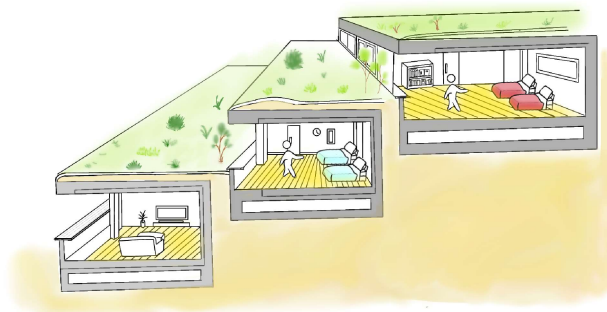
A-A断面図 1/200

宿泊施設

林に立ち入ると感じる独特の湿度、音、木々、光、虫や鳥たちの生活環境が重層的に絡み合い、つくられるある種の空間ともいえる領域性がある。それぞれは共存という言葉を超え、しなやかにかわしながらも強く結びつき、互いに享受し続けている。地中内部では、よりその関係は強く、地面に落とされたそれぞれの一端は、ミミズや微生物により分解され、土は更新・改良を続け、積層を繰り返す。

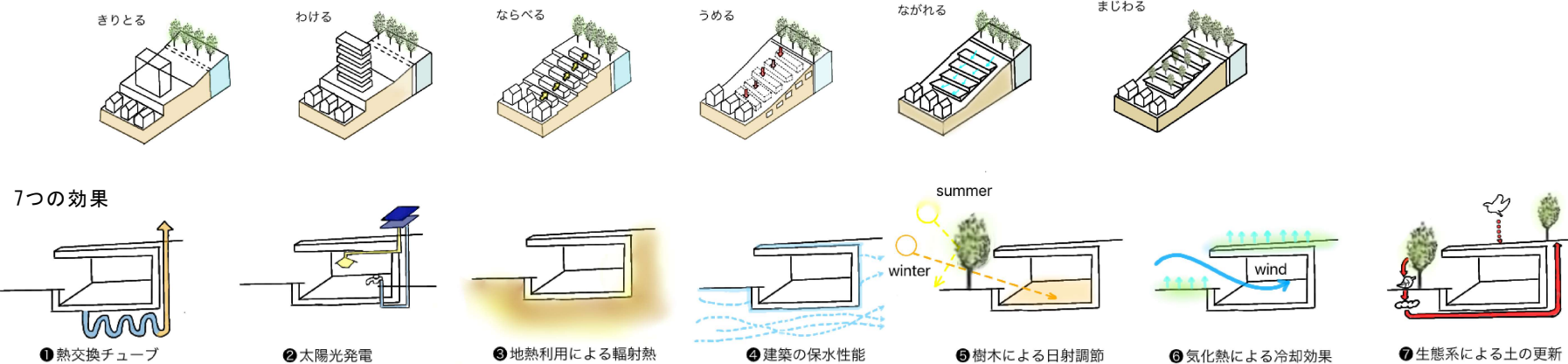
この計画は神社と町の中間域として、不安定ながらも造成を繰り返し自然と調和したいと考えた。大地に埋め込んだスラブを内部空間とし、それぞれのその上層階の庭として、森の中の広場となる。木々や森のつくる領域に囲まれつつも、町に透けだしたその生活は、都市との関係性を保ち続ける。

建築自身が大地と連続した土を基盤として、雨水、野草、落葉、虫、それらミクロな領域まで継い、土のリサイクルの中に身を潜めながら、自然の力を譲り受けていく。この建築行為は自然を制御することではなく、生物の力と共に更新を続け、季節や森の成長と共に、未来までも表層に積層していく。



断面 パース

ダイアグラム

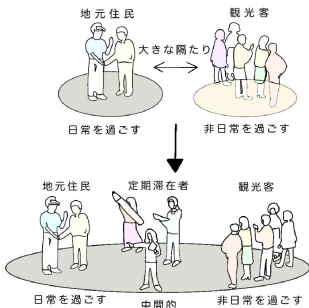


ホテルから見た景色

なぜ宿泊施設を？

住むきっかけづくり

1、2週間程度の中期滞在が可能である施設を設けることで、松山の魅力を知り、移住のきっかけをつくる。若い世代の増加を目的とする。



なぜ土の中に埋めた？

1、住みやすいから

土の中に建築物を埋めることで気温の変化が一定になる。これにより年間過ごしやすい環境になる。

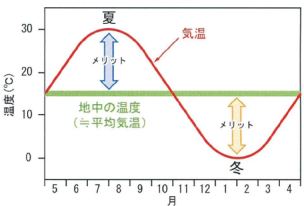
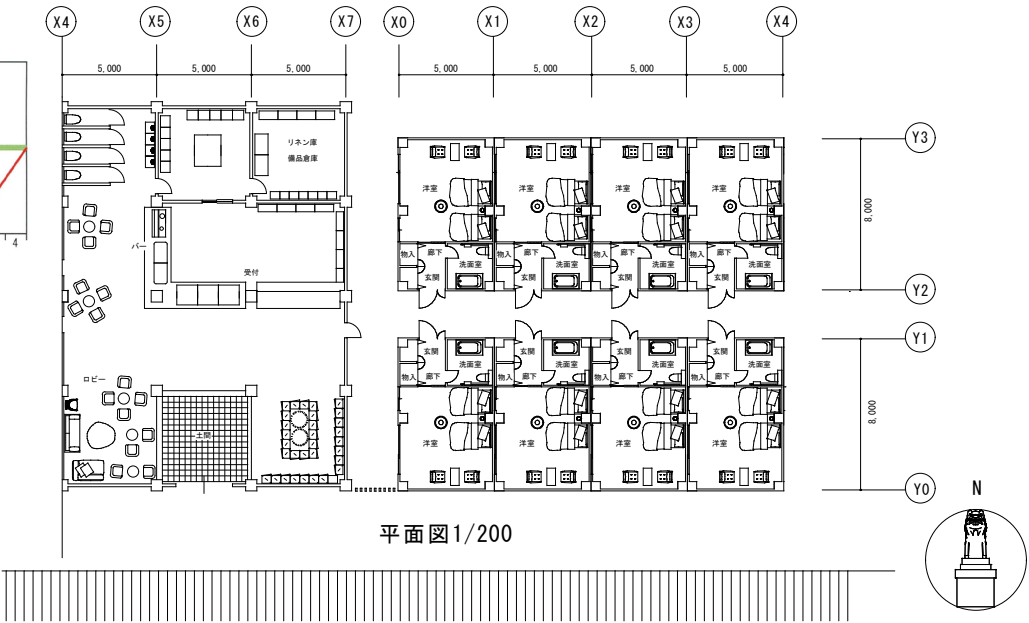
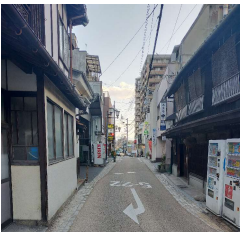


図-2 安定した地中温度を利用するメリット

2、自然の環境保全

伊佐爾波の石段に溶け込んだ外観とした。



平面図 1/200

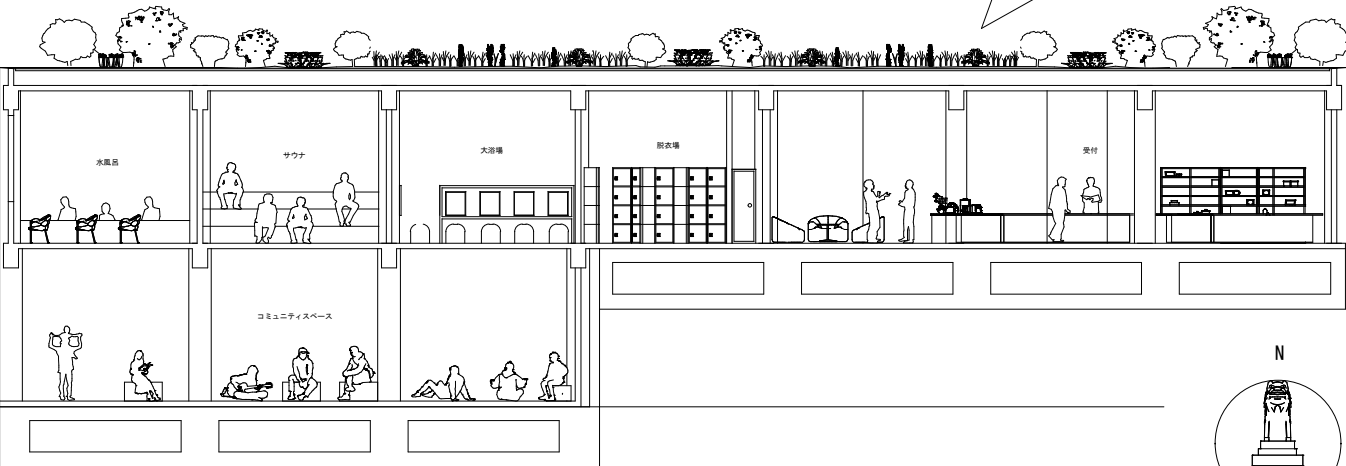
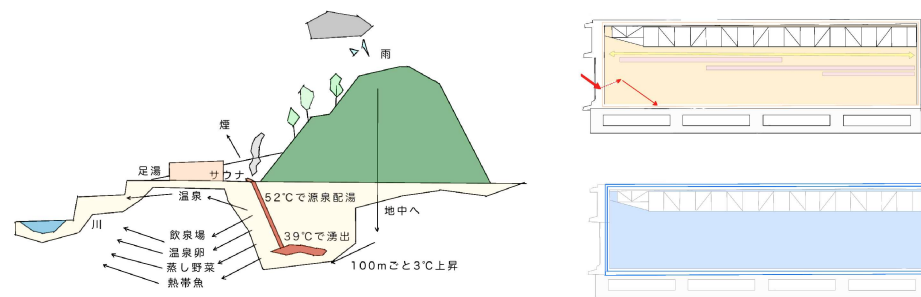
温泉施設

コンセプト

道後の商店街の賑わいを取り戻し、地域の交流の場となる銭湯を設計する。自宅にお風呂があり、湯船につかる生活が当たり前になっているが、銭湯に行き行って入ることで、日常生活から少し離れてぼんやりとでき、自分の時間を過ごすことができる。そして、いつもとは違う空間で誰かと話しながら入るなど、小さな非日常を味わうことで、日常生活が少し豊かになるのではないかと考える。また、ただ銭湯に行くことを目的にするのではなく、仕事の合間や寄り道など、生活の延長線上に銭湯があるので、銭湯がより身近なものになるような施設を提案する。

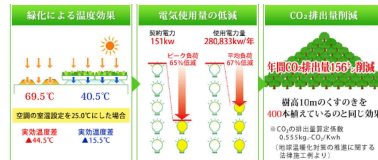
雨水、温泉水の活用

私たちの世界では常に水の問題が取り巻いている。私たちは、今一度「水」の大切さを見直す必要がある。そんな中で、河川・地下水に次ぐ「第3の水源」として、大規模な雨水・温泉水利用を提案する。



A-A断面図 1/150

屋上緑化のメリット



1, 多世代のための賑わい拠点形成

市民と観光客どちらも対象とした宿泊機能のある施設により魅力ある賑わい拠点を形成し高齢者及び若者の定住人口の増加を図る。

2, 緑のネットワーク構築

現在、神社の周りに緑が集中しているという特徴を生かし建築物と緑を連続させる。

3, 周辺環境との調和

敷地周辺には湯神社や古い道後の町並みが見られ、周りの景観を壊さず風景との調和するデザインとする。

4, はたらく温泉

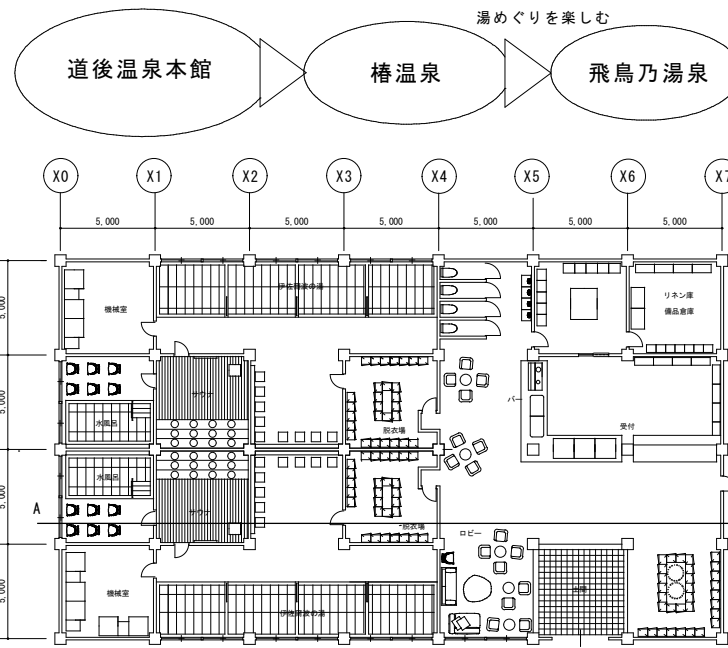
人が働く場。ホテルや飲食など温泉街特有の働く場を設けることで若者の増加、また、新たなコミュニティの活性化が望める。宿泊者よりも長期的な滞在が見込め温泉街での生活の体験や文化の理解により移住の可能性が望める。



地元で愛され続ける、椿の湯。



入浴できる重要文化財、道後温泉本館。



一階平面図 1/200